

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 藤田武士 所属： 茨城県立勝田特別支援学校 記録日：2017年2月11日

キーワード： コミュニケーション, 表現, 生活支援

【対象児の情報】

- ・学年 小学4年生の女児
- ・障害名 知的障害, 斜視
- ・障害と困難の内容

【見ること】

- ・視力検査では、犬・鳥・蝶・魚の絵カードを使用。距離は3m。提示された絵カードと手元の絵カードを合わせることができた。

【コミュニケーション】

- ・発語は喃語程度。内言語は多く、簡単な手話やジェスチャー、指さしで自分の思いを伝えようとする。「おいしい」、「ちょうだい」、「おねがい」、「こわい」、「おに」などの手話を使用しているが、本人の思いを受け手が受け止め切れていない時がある。

【食事面】

- ・再調理でペースト食のため、自分が食べている給食がどういうものなのか、わからない時がある。
- ・一気に食べてしまうことがあり、教師がそばに付いて、数口分ずつ皿に取り分けて提供している。
- ・好き嫌いが多かったため、まんべんなく食べることができるよう、教師が食べる順番をコントロールしている。
- ・教師が提供するものと自分が食べたいものが異なると、席を立ち、教師の机上にある給食を覗き込む様子が多く見られる。

【活動目的】

- ・当初のねらい

<目標> コミュニケーションの幅を広げ、コミュニケーションが成り立つ場面を増やす。

第1段階・・・伝わる経験を積み重ねる

- ・給食場面において、写真を見て、自分が食べたいものを伝えることができる。
→給食の一品ごとの写真を提示し、それを選択することで食べたいものを相手に伝えるようにする。

第2段階①・・・自分の気持ちを選んで伝える

- ・給食の場で「おいしい」や「もっと」などの気持ちを相手に伝えることができるようにする。
→今まで使用していた簡単な手話にシンボルを加え、表現することができるように進めていく。
- ・帰りの会での発表で、その日の学習と感想を、シンボルを選んで発表することができる。
→曜日ごとの時間割と、「楽しかった」、「頑張った」などの感想のシンボルも用意し、組み合わせて発表することができるようにする。

第2段階②・・・伝える手段を確立していく

- ・何を伝えたくて伝わっていないのかを観察し、伝えたい事の分析とその分析に基づく伝達手段の確立を図っていく。

- ・実施期間 平成28年4月～1月
- ・実施者 藤田武士（研究採択者）
- ・実施者と対象児の関係 小学部4年1組クラス副担任（担任他2名）、小学部4年学年主任、小学部副主事

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

＜食事面＞

○食べたいものを伝える手段は指さしによる選択が主であるが、それを伝える際に、席を立てて教師の机をのぞき込もうとする姿が見られる。また、うまく伝わらないときや、食事に飽きてしまったと思われるときに、机の引き出しの部分に足を乗せたり、椅子の上に片足を乗せたりするなど、姿勢が乱れるときがある。

○食べて空になった皿を周りの教師に見せ、「食べたよ」とアピールする姿が見られるが、他の児童の食事介助をしていたりするので、本児を支援する教師が代弁するなどして間を取りもっている。

【困り】 自分が食べたいものと教師が提供するものが異なる時がある。

隣の机にある給食を立ち上がってのぞき込み、指を差して伝えている。

→ 自分が食べたいものを教師に伝えることができれば、給食の時間が充実したものになるのではないだろうか。

・活動の具体的内容

【使用したアプリ】 DropTalk

【実施した時間帯】 給食 【実施した頻度】 必要に応じて随時使用

【実践活動の様子と対象児の変化】

iPad を使って、食べたいものを伝えてみよう！

第1段階・・・伝える経験を積み重ねる

初めに、昨年度までと同じ支援方法での給食の様子を記録したり、引き継ぎ資料を見たりして、本児の食事の様子を確認した。その後、iPad を用いて、児童が食べたいものを支援者に伝える取り組みを始めた。その際、iPad で食べたいものを伝える様子をビデオで記録したり、記録用紙にタップして食べた順番やその時の様子などを記述式で記録したりして、iPad 導入前と導入後の様子の違いを比較した。



給食の様子

＜使用前＞	＜使用后＞
<ul style="list-style-type: none"> ・野菜系のおかずは食べないことが多かった。 → 緑色のおかずは、色味で判断し、食わず嫌いが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶濃いめの味付けを好む傾向がわかった。 ▶一口食べてみると味がわかり、食べ続ける様子が見られるときもあった。
<ul style="list-style-type: none"> ・食べたいものを指さしで伝えていた。 → 他の生徒の対応をしている気が付かない場合がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶何度もタップして、音声の流れ、教師が反応をしてくれると嬉しそうな表情をする様子が見られた。
<ul style="list-style-type: none"> ・支援者の机の上にある給食を立ち上がってのぞき込む様子が多く見られた。 → メニューが何なのかわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶iPad の写真を間近でよく見てタップできた。 ▶主菜を中心に、タップして要求する様子が多く見られた。
<ul style="list-style-type: none"> ・支援者が食べていたり、児童のお腹が一杯になったりすると、離席する様子が見られた。 → 注意を引く行動ではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶食事の離席はなくなった。 ▶食事の姿勢も、机に向かって座るようになった。

＜改善点＞

・支援する教師が研究採択者以外の場合に、支援方法やかかわり方に違いが出てくることが考えられる。本児が伝えることを実感できるように、支援方法やかかわり方の共通理解を図ると同時に、考え方の共

通認識も再確認した。

→ 食べ始める際に、教師が iPad 上の写真をタップして、一口ずつ、本児が試食してから食べ始めるようにした。そうすることにより、食事の始めにそれぞれの食べ物の味を知ることができ、本児が本当に食べたい食べ物と iPad 上の写真をマッチングすることができ、教師に食べたいものを伝えることができるのではないかと考えた。

気持ちも伝えてみよう

第2段階・・・自分の気持ちを選んで伝える

給食の場面で「おいしい」や「ください」などの気持ちを相手に伝えることができるようにする。今まで使用していた簡単な手話にシンボルを加え気持ちの面でも本児の思いを表現することができるように進めていく。

→ 食べ物の写真と一緒に「おいしい」と「ください」のシンボルを配置してみた。始めは、教師側から本児に対して、その日一番よく食べているおかずをタップして、それに続けて「おいしい」のシンボルもタップして、「〇〇、おいしい？」と聞くことを何度か繰り返してみた。



・対象児（群）の事後の変化

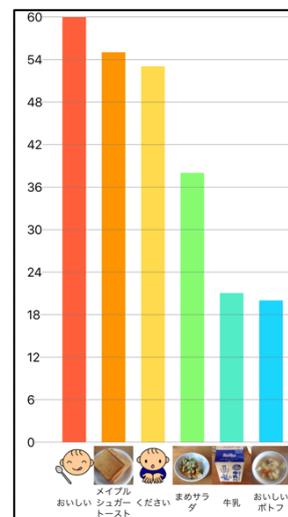
第1段階・・・伝わる経験を積み重ねる

昨年度までは、野菜を主としたおかずは食べず嫌いがほとんどであった（引き継ぎ資料からの情報）ため、今年度も野菜が主となるおかずは食べないかと思っていた。しかし、この取り組みを通じて味見の時間を取るようになってから、野菜を主としたおかずでも、味見の後に iPad の写真をタップして本児自身が食べたいと伝えることが何度もあった。



【写真①】ある日の給食

そして、それらのおかずに通ずることは何かと分析をしてみたところ、野菜の種類や色味の違いでの好き嫌いは関係なく、味つけの濃さが関係しているのではないかと考えられた。傾向としては、味つけの濃い、味のはっきりとしたおかずを好んで食べるようになってきた。例えば【写真①】のある日の給食を見るとこの日は、メイプルシュガートーストは好きであることは予想された。次に好きそうだなと思われるのは、まめサラダよりポトフではないかと予想された。



しかし、結果を見るとまめサラダの方が、圧倒的に要求が多く、まめサラダは、ドレッシングがたっぷりと和えられていたからではないかと思われる。

第2段階・・・自分の気持ちを選んで伝える

よく食べていたおかずではなかったが、本児が好きなパンの写真をタップして何回か続けて食べる姿を見て、「本当にパンが好きなんだねえ。」「今日のパンおいしいもんね！」などと言葉をかけていたところ、本児が「パン」の写真と「おいしい」のシンボルを続けて押し（下部写真）、私が反応すると「おいしい」の手話も交えて、「パンがおいしいからもっとちょうだい」という本児の気持ちを伝える場面があった。



【報告者の気付きとエビデンス】

・ <給食場面>主観的気づき

自分の思いが伝わる経験を積み重ねたことでコミュニケーションの幅が広がったのではないか？

・ <給食場面>エビデンス

給食という毎日ある活動場で、食べたいものを iPad というツールを使って教師に伝えるというやり取りを通じて、「伝わる」経験を積み重ねた。

エピソード① 味の好みが変わってきた

昨年度までは、野菜を主としたおかずはあまり食べることはなかった（食べず嫌い）。この取り組みを通じて味見の時間を取るようになってから、野菜を主としたおかずでも、味見の後に iPad の写真をタップして本児自身が食べたいと伝えるようになった。基本的に味がしっかりしているメニューが好みだとわかった。

味見は、食事の最初に、iPad で表示されている写真をタップし、教師からも「〇〇だよ。」とメニュー名を言葉かけしながら、一口分ずつ食べている。本児にとっても、その味見の一連の流れが定着し、一通り食べた後に、「今日はどれから食べますか？」という教師の問いに対して、iPad 上の写真をタップして意思を伝えることができるようになった。

エピソード② 好きな食べ方を伝える

この日は「さんまの蒲焼」と「ご飯」を中心にタップをしていた。食べ始めてしばらくすると、本児が「ご飯」と「さんまの蒲焼」を続けてタップし、さらに「ください」のシンボルもタップした。「一緒に食べるの？」と尋ねると、左右の手の人差し指をくっつけて“一緒”のジェスチャーを。それ以降、ご飯とおかずを一緒に食べたいと伝えることが多く見られるようになった。



下記の一覧は、とある日のDropTalkのログの一部である。この日のメニューは「ご飯」、「なすのみそ汁」、「豚肉の香味焼き」、「和え物」であった。ログを見ると



・・・→おいしい→**ご飯→肉→ください（手話：いっしょ）→【食べる】**→おいしい→・・・

※ 2回連続タップしているところは、タッチパネルのタッチレスポンスが遅いときがあったため、2回押したためである。

というように1品だけの要求から、2品の要求をするようになり、このときに「いっしょ」の手話もあわせて表現し、「ご飯」と「肉」を「一緒に食べたい」ということであった。こうしたやりとりをするようになったことで、教師側も、本児が本当に食べたいものができるようになり、この後も、「納豆」+「ご飯」はもちろんのこと、「ジャガイモのそぼろ煮」+「ご飯」や「豚汁」+「ご飯」など、本児が教師に思いを伝えることができる様子が度々みられるようになった。

エピソード③

本児が好きなパンの写真をタップして、何回か続けて食べる姿を見て、「本当にパンが好きなんだねえ。」「今日のパンおいしいもんね！」などと言葉をかけていたところ、本児が「パン」の写真と「おいしい」のシンボルを続けて押し、私が反応すると「おいしい」の手話も交えて本児の気持ちを伝えるようになった。

・ <日常生活場面>主観的気づき

伝わる経験を積み重ねたことで、生活の中でも伝えようとする気持ちが膨らんできたのではないかと?

・ <日常生活場面>エビデンス

iPadに限らず、伝える手段としてシンボルカードなどを中心に使用し、コミュニケーションを取ろうとする様子が見られるようになってきた。

エピソード④ 帰宅方法の確認

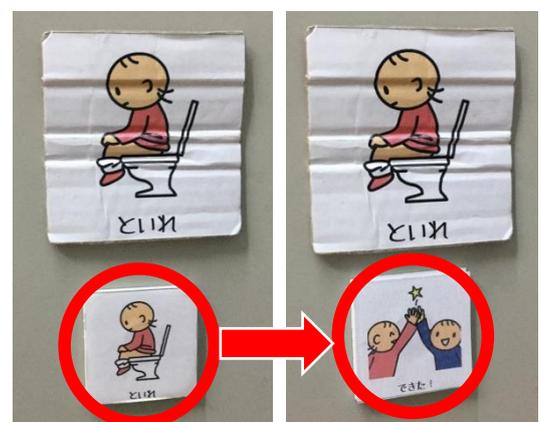
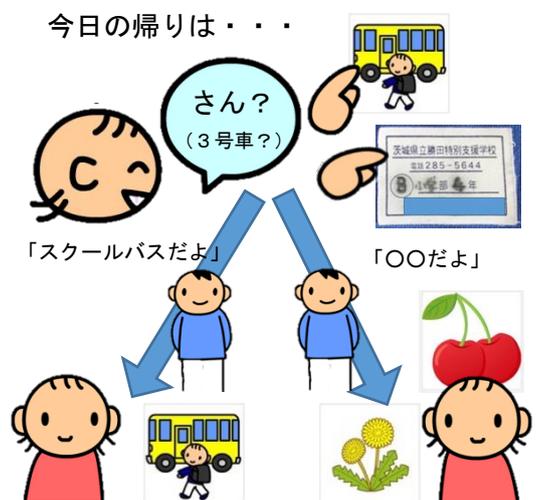
初めは、帰りの会の前などに教師と一緒にiPadを使って帰宅方法を確認していた。その後、iPadで使用しているものと同じシンボルカードを用意し、どちらを使用してもいい環境を作った。基本的に本児はスクールバスでの帰宅が好きなので、まずは「スクールバス?」と教師にアクションを起こしてることが多いが、その日の帰宅方法(スクールバスか放課後等デイサービス)をシンボルカードで確認すると「やったー!」と両手を上げて喜び、納得する様子が見られるようになった。手軽に使えるシンボルカードは、iPadと同じ使い方ができることを本児も理解しているので、そちらを自分から進んで使用し、教師とやりとりする様子が見られるようになった。

また、数字にも興味があり、自分の名札に書いてあるスクールバスの号車番号(本校の児童生徒の名札には、利用するスクールバスの号車番号を記入するスペースがある)を指で指し示して、「さん。」という発語と一緒に「今日は3号車?」と帰宅方法を確認する様子も見られた。スクールバスで帰る日であれば、「そうだよ。」と教師が答え、それと同時にスクールバスのシンボルカードを提示するようにした。そうしたやり取りも、本児にとって伝えることを実感する機会となったのではないかと思う。

エピソード⑤ トイレ

本年度4月からトイレでの排尿ができず、不安がる様子が見られた。教室は、前年度と変わらず同じ棟、同じ階で、使用するトイレも同じ場所を使用するので場所に対する不安はないかと思われる。可能性があるとするれば、担任が3人も新しい教師だということ、その新しい教師とトイレに行くということに対する見通しがもてない→その教師とトイレに行くことが不安・・・なのではないかと推測される。しかし、ある日、下校方法の確認や日常生活の中でも頻繁に使用しているシンボルカードの中から、

“トイレ”のシンボルカードを手渡し、「トイレに貼ってきて!」と伝えたところ、シンボルカードを手に持ち、教師とともにトイレに行き、トイレで排尿することができたのである。偶然なのかもしれないが、その日、トイレで排尿ができたことで、何かしらのスイッチが入り、それ以来、必ずカードを教師に持っていき、トイレに行くことを伝えて、排尿することができるようになった。また、トイレができたことに対して、教師からの称賛だけでなく、本人が目見てわかる形での達成感を感じ、「トイレ」のシンボルを表に、「できた」のシンボルを裏に貼ったシ



裏返すと「できた」のシンボルが現れる

ンボルカードを用意し、トイレに行き、帰ってきたら“できた”と自分でも確認することができるようにした。併せて、クラスの担任のアイディアで、トイレにシールを貼る表も用意したことで、トイレに行きたい時には、自分から、今まで使用していた大きいシンボルカードと新しい表裏のシンボルカード、そしてシールの3点セットを持って教師にトイレに行くことを自分からアピールし、トイレで排尿をすることができるようになったのである。家庭では、個別面談の時に、そうした様子をお話しし、同じシンボルカードを用意したが、まだ上手くはっていないとのことであった。

【今後の見通し】

当初のねらいの部分で予定していた

第2段階②・・・伝える手段を確立していく

・何を伝えたくて伝わっていないのかを観察し、伝えたい事の分析とその分析に基づく伝達手段の確立を図っていく。

については、そこまで取り組みが進まなかったが、今後の取り組みとして帰りの会での「今日の出来事」コーナーでの活用を考えている。DropTalkの機能の一つである『文章モード』を使い、その日の感想発表ができればと考えている。

2月後半、給食での取り組みの最中に、本児が偶然、この文章モードボタンを押し、シンボルをタップしたことで、文章が読み上げられたという出来事があった。そのような経験から、本児の中でも、「なにやらシンボルをタップすると続けて音が出る。」というような発見があり、私自身も文章モードを活用することができるのではないかと考えた。

帰りの会での活用を通じて、文章として自分の思いや考えが伝わる経験を積み重ねて行くことで、今後の日常生活の中で、何か自分が伝えたいけど伝わらない時に iPad を使って、伝わりきれない思いや考えを伝えることができるようになれば、本児のコミュニケーションの幅が広がるのではないかと思う。伝達手段の「確立」とまでは行かないかもしれないが、伝達手段の『さらなる獲得』が、本児の中で、iPad というものがコミュニケーションの助け船のようなものになればいいのではないかと考える。



DropTalk の文章モード